序

本に序文は書より極つた事にて必ずあるべきものなれど只手前味噌を並ぶるに等しければ讀刺の目的を以て生が以前に認り書きたる狂言を是れへ御目見得換りに差出申候

是れへ出でたるは、野澤藻蛙とて隱れもない、三味線彈で御座る、兎角連中が、此なたの知りない六ケ敷物斗り習わせますに依ツて、連中に教はるよりは、此なたの覺えに參るほうが一段といそがしい事で御座る、彼樣な事なれば、もそつと稽古を致いて置けば宜かツた、それに今日も例の朝寢を致いたに依て、はや彼是と十一時頃と相見える手水も使はねばならず朝晝兼帶の御飯も喫べずばなるまいコリヤ迚も稽古に參るよりは、連中の在せます仕度をせでは叶ふまい、サテ〳〵いそがしい事かな〳〵(中入する)罷り出でたるは木の葉と申す連中で御座る、此度紅葉館に初會の催しがある、何か換つた事を致いて、見物を吃驚させよふと存ずるに、師とたのふだ人がぐら〳〵で便りない談合のいたし屹度こらして遣らうと存ずる、イヤ幸ひと向ふからくらま君と鎗好君が見へられた、一トツ呼びかけて呉れふ、ヲ、イ〳〵(鎗く)何事じや(木)外でも御座らない、師匠が兎角便りな

い、何と是から一番工風をこらして以後は謹みますと、詫らせよふではあるまいか(皆々)一段と宜からふ(木)そうあらばごの様にいたいて、困らして呉れやうぞおの〳〵言はしめ(く)さればなり、まだ朝寝をいたいて居るで、門口へ貸家札を張つて呉れふか(木)それは近所の手前がある、氣の毒じや(鎗)手當り次第に三味線や本を、棚の上へほり上げて呉れふか(木)それも無益じや(く)入口から金盥や何かで、踊り込んではどうじやな(木)それでは却つて此方を近所から叱ろふ、さらば此う致さふぞ、紅葉舘の初會に各々、芝居淨璃瑠をやると云ふて、困らせやふではあるまいか、(皆々)芝居淨璃瑠とは、如何なことでおじやるな(木)語り物を千兩幟として、鎗好君は女房くらま君は鐵ケ嶽、自分は猪名川と役割を極めて鬘や衣裝を附けて舞臺に立上つて、芝居すると云ふて稽古をしてハ、三味線も引かれることでおりない、一段と面白かろうぞ(鎗く)成る程〳〵面白事である、(木)ヤア兎かう云ふ内ハヤ師匠方へ參つた、コレハ扨て珍らしいことである、ちやんと掃除が出來ておりやる(く)ずつと通らふ(野)やあ是れは何れもそろわせら

れて、サア〳〵火鉢の傍へ据わらせませ〳〵(木)さて師匠、此度の初會に芝居淨瑠璃を致いて見たいと思ふずるに依ツて、今日より稽古に取掛らふと存ずる(野)それは又奇妙な事かな、して如何なことでおじやアるな、(木)されば鎗好君は女房、くらま君は鐵ケ嶽と、自分は猪名川を夫れ〳〵衣裝をつけて立上つて淨瑠璃を語りながら、振りを仕樣と存ずる(野)何は兎もあれ遣つて見やしめ(皆々)心得た(木)跡に猪名川諸手を組み、暫し思案に暮れけるが(鎗)始終立聞女房が、涙かくして傍により(く)劣生外方に用事もあるに、それでは鐵ケ嶽の出場か遲なるに仍つて、土俵場を先きへ廻せられたい(木)そうあらば土俵場が一段と六ツかしい、怪我をせぬよふ相撲を取らでは叶ふまい(木)心得た……中略……又も呼び出す角力の名乘り入かへ〳〵勝負けも、今一番と夕日につれてかたや猪名川〳〵、鐵ケ嶽〳〵と、名乘上げられしこ踏みならす鐵ケ嶽、こなたは尙も、しよけ鳥の、しほ〳〵上る土俵の上、すは千番に一番の角力と力む幾萬人、靜まり返つて見物す、片や猪名川〳〵鐵ケ嶽〳〵と、やつと引たる行司の團扇、直に附け入る鐵ケ

嶽、つゝと兩腕さし込ます(師)ヤあ〳〵〳〵〳〵そうやられては、たまることでありない、しばらく〳〵屋根からは瓦が落ちる、柱も根たも泣いてゐる、皿も鉢もみぢんになります、いま少し靜に願ひたい(木)何迚〳〵、此程に身を入れえでは(く)見物が見て吳れべきぞ(鎗)泣顏をせず、三味線を引かずば、叶ふまじいぞ(野)ワア〳〵〳〵〳〵それを御免されとあらば如何なさるな、先づ兎あれ、近所へ詫に參ります〳〵(木)やあそふ云ふて逃げふ迚逃がするでない(く鎗)左なあれば、紅葉舘の初會には、如何に賴まうとも(皆)やるまいぞ〳〵〳〵〳〵

緒言

一本書ハ手前が淨瑠璃に心を寄せたる以來師匠の語る處又ハ先輩の言ふ所を書留め隨分長き月日を要したるに尙ほ太夫三味線彈きと各專門家に就て屢〳〵校正を經誤りを訂し種〳〵苦心の末出來上りたるものなれども元來迂生は筆を採るとの隨分きらいな方なれば一〳〵文法によつて書綴りたるにあらず出る儘よ書作したれは傍り假名の相違等の誤りは隨分あるべけれど一々親切を主としたれは安心に研究せられんとを希望して止まず殊に太夫三味線彈校合の名題を揭ぐる筈なれども何れも營業上神聖を洩らす抔にて憚る處ろもあり旁々記載せされば其邊は然るべく洞察を乞

一本書著述に付ては少からぬ費用と編者多日の苦心とを要したれども元來手前と同好の方に頒つの精神を以て發刊せしとあれば價格は實價より別段多分の利益をも受くるにあらず仍つてお直切なく求られ

淨瑠璃秘傳

んとを望む

一肝心眼目と云ふ處ろに至つては婦人方と雖も讀易き樣傍訓を附し置たり

一本書は小說の如く讀流しにしては何の効もなければ稽古の度び傍に置いて事に觸れ物に當つて克く熟考して會得せられんとを望む

一本書は前に述べたる通り太夫三味線彈きの各秘藏する傳授卷より調らべ來り倘當今流行の淨瑠理に當つて會得なし易き樣楷級稽古法を編成したるなれば段々に章を追ふて熟覽考究せられんと勘要第一の事也とす

編者識

淨瑠理秘傳

目次

第一章　淨瑠理の緣起　十一丁

小野小通を發明者とするの辨妄

第二章　清水理太夫竹本義太夫近松門左衞門竹田出雲角澤撿校竹本筑後等名人二十一人の畧傳　十五丁

第三章　淨瑠理の小沿革並に稽古法の事　二十四丁

規則を立て稽古するの方法の事

第四章　語り方心得の事　二十八丁

まくらの事　道行の事　景事の事

時代物の事　ちやり場の事　世話物の事

第五章　老幼貴賤氣持ちの事　三十一丁

殿上人の事　大將の事　猛將の事

手負の事　修羅の事　物語りの事
酒の醉の事　ども の事　馬鹿の事
老人の事　女房の事　遊女の事
娘 の 事　子供の事　敵役の事　三十七丁
第六章　語り方音聲の事
秘傳六節　四十一丁
第七章　節の詳解の事
通計十七ヶ條　四十四丁
第八章　節の名目の詳解
ハルキン表具文彌等通計　七十丁
第九章　自作淨瑠璃節配心得の事
秘傳八ヶ條　七十一丁
第十章　三味線の說明

淨瑠璃秘傳

淨瑠璃秘傳

第十一章　三味線彈方の事　七十三丁
圖　入
第十二章　三味線符合幷に手附の解　八十丁
三味線つぼの事　圖　入
三味線朱四十八字の詳明　別摺り挿入
三味線朱入れ畧しるし十七ヶ條の說明
三味線朱入れの例太功記十段目別摺り挿入
第十三章　論　結　八十丁

淨瑠璃秘傳

石村撿校
三味線傳來　竹の小田卷　全部三卷

目次

上の卷　口　志賀の里撿校住家の段　八十三丁
切　撿校兄弟出立の段
中の卷　道行涙の八重山　九十五丁
下の卷　口　琉球國貝勒山の麓鰻取り秋香住家の段　九十六丁
中　葛紅葉深山の錦貝勒山半腹の段
切　顏鴻基草蘆三味線秘曲傳授の段

淨瑠理秘傳

第一章　淨瑠理の小緣起

山田鋤月居士著

扨も此の淨瑠理と云へる稱号の起りは何世紀に其嚆矢を顯したるや、昔しより、今よ至其久しき間年をへ、世を經ると雖も、益其隆盛を隕さゞるは、實に其業の世々人々の發明を重ね愈玄妙深遠にして、容易に其靈妙なる微明の精極を究め難きに外ならず、されば其稱号は元より由來因緣世々流行に伴ひ變遷に連れて、然るべき著書のある筈なれども、扨是れと云ふへき程の由々しき物も見受けねば如何なる時より起りたるかは詳かならず、併し粗ぼ取調る緒口を得たれば、本書續篇として後日出版する事とし、茲に其一二を書き記さんよ、柳亭が還魂紙料連歌師宗長の日記享祿四年のくだりに、小座頭あるに淨瑠理語らせたり云々といへる語あれば